

論文

莊子注釈書体例考《其の1》

平木真快

(目次)

序

- 1：莊子注釈書の体例変遷史
- 2：莊子注釈書の理想的体例私案

序

本稿は、先ず莊子注釈書の体例を史的に逐次検証する。然る後に、望ましい体例を試作する。

体例とは何か。体例とは、文章を一目瞭然ならしめんがために考案された所の形式である。この形式は、人智が発達するにつれて、粗雑から精密に、あるいは簡明にと変遷してきた。本稿は、その移り変わりの様子を郭象の莊子注（宋版）を起点に、各注釈書の成書年次に従って、今日まで順次検証する。然る後に、より便利で分かり易い体例を試作しようとするのである。

本稿は紙数の都合で、数回に分けて発表する。

《其の1》は、①：312年、莊子注、郭象から、②③：1574年、莊子口義補注、張四維までを収録する。

1：莊子注釈書の体例変遷史

① 312年 — ②③ 1574年

1：312年，莊子注，郭象，拠北宋南宋刊合璧本。

嚴靈峯著老列莊三子知見書目（1965年）及び馬森著莊子書録（1958年）に拠れば，郭象注以前に既に数種の注釈書が存していたようであるが，筆者はそれらは孰れも未蔵未見である。その多くは散佚しているか，あるいは諸書に数句を残すのみであるという。

無求備齋・莊子集成初編に収録されたもの（上述宋版）をみると，体例は全体に極めて拙劣である。すなわち：文頭は改行なし。序・原文・注・音義（陸徳明）ともに句読点なし。各篇毎に篇旨あり。原文は短句毎に区切って，下部に注（小文字2行）を付す。注部分が終わると，句点「。」を打って，次に続く音義との境を明確にするのである。要するに句読点のない文字をびしりと羅列しただけであって，読者への気配りは全くしていない。

2：631年，莊子治要，魏徴，拠日本尾張国校刊群書治要本影印。

文頭は改行なし。読点あり。原文下部に注（小文字2行）を付す。篇旨なし。

3：636年，莊子音義，陸徳明，拠清乾隆56年慮文弘刊抱經堂叢書本影印。

文頭は改行なし。句読点なし。原文中音釈すべき語句（1字と2字が多い）の下部に音義（小文字2行）を付す。篇旨あり。音義と原文は1文字分空けて見易くしている。

日本・寛保元年刊本（1741年，服部南郭考訂）を見ると，内篇は：原文は句読点なし。音義は読点「、」を付す。外雑篇は：原文・音義ともに読点を付す。

巴黎国立図書館蔵・日本沙州二十六子排印本は，原文・音義ともに上述乾隆刊本と異同する箇所があるものの，体例は同一である。

4：663年，莊子疏，成玄英，拠清光緒10年刊古逸叢書本影印。

文頭は改行なし。序・原文・注疏ともに句読点なし。原文下部に郭注・成

疏（小文字2行）を付す。注疏は「疏」という文字によって区切る。篇旨なし。

5：755年，莊子邈，文如海，摛明刊正統道藏本影印。

文頭は改行なし。句読点なし。篇旨あり。

6：786年，莊子意林，馬綏，摛清乾隆間刊武英殿聚珍版叢書本影印。

文頭は改行なし。原文・注（小文字2行）ともに句読点なし。注の途中，「案」という文字を冠してから案文に入る。篇旨なし。

7：1070年，南華真經新伝，王元沢（即王雱），摛明刊正統道藏本影印。

文頭は改行なし。原文は短文毎に区切り，1字下げた後，改行なしで解釈をする。句読点なし。篇旨なし。

8：1084年，莊子解（或云：莊子義・莊子注），呂惠卿，摛民国23年陳任中輯校排印本影印。

文頭は改行なし。原文は段落毎に区切り，解釈（小文字2行）を付す。句読点なし。篇旨なし。

9：1084年，南華真經章句音義，陳景元，摛清道光間錢熙祚刊指海本影印。

文頭は改行なし。原文33篇を255章に分けて語句（1字と2字が多い）を注釈する（小文字2行）。句読点なし。逍遙游篇以外は篇旨なし。

10：1084年，莊子闕誤，陳景元，摛明刊正統道藏本影印。

文頭は改行なし。句読点なし。篇旨なし。

11：1086年，南華真經直音，賈善翔，摛明刊正統道藏本影印。

文頭は改行なし。原文語句下部に反切のみ注す（小文字1行）。句読点なし。

12：1260年，莊子口義，林希逸，摛明刊正統道藏本影印・民国60年刊台湾弘道文化事業有限公司本。

文頭は改行なし。原文は段落毎に区切り，1字下げた後から解釈する。句読点なし。内篇は篇旨あり。外雜篇は篇旨なし。

13：1294年，莊子南華真經点校，劉辰翁，摛明刊劉澗溪点校三子本影印。

文頭は改行なし。原文は段落毎に区切り，1字下げた後から解釈する。句読

平木 真快

点なし。原文は強調したい文句の右側に「、」あるいは「。」符号を圈点する。内篇は篇旨あり。外雜篇は篇旨なし。

14：1331年，南華内篇訂正，吳澄，捫明刊正統道藏本影印。

文頭は改行なし。内篇7篇を計37章に分ける。訂正は僅少。注釈なし。句読点なし。篇旨なし。

15：1367年，南華真經循本，羅勉道，捫明正統間刊道藏本影印。

文頭は改行なし。原文は段落毎に区切り，1字下げてから解釈する。句読点なし。内篇は篇旨あり（小文字2行）。外雜篇は篇旨なし。

16：1538年，南華標略，張位，捫国立中央図書館藏明万曆間吳宗玄刊本影印。

文頭は改行なし。原文は句点を打つ。句点は右側もしくは中央部，時には左側におかれて一定しないが，多くは右側にある。句点を1字分とみなす発想はまだ生まれていない。上欄に簡単な評注を付す。篇旨あり（小文字2行），ただし句点はない。

17：1559年，莊子闕誤，楊慎，捫明刊升庵外集本影印。

文頭は改行なし。句読点なし。篇旨なし。

楊慎撰莊子闕誤は，前掲陳景元撰莊子闕誤と書名・内容ともほぼ同一。

・楊両本の相違を列挙すると下の如し：

◎陳本は闕誤数を文末に「右○字」と付すのに対して，楊本は篇名下部に「○字」と付す。

◎陳本の注は小文字1行，楊本は小文字2行である。

◎陳本は音釈なし。楊本は本文後部に1字分大の符号「○」を付してから音釈をする。

◎陳本の注は曖昧，楊本のは明確である。

例如：

〔陳本〕「檜楡枋而止」の注は「見文本及江南本旧闕」。

〔楊本〕「檜楡枋時則不至」の注は「文本及江南日本枋下有而止字」。

陳本（1084年）と楊本（1559年）の間には，ほぼ500年の歳月が横たわっ

ている。両本を比較すると、陳本よりは楊本の方がより分かり易いことに気付かされる。文化というものは紆余曲折はあるものの、特に中国の場合は遅延としているのであるが、粗から精の方向に進み行くことを原則とする。体例もまた人智の発達につれて、ゆっくりと粗から精へと進歩していく過程がこの研究を通して確認することができる。

18：1559年、莊子解，楊慎，捫明刊升庵外集本影印。

文頭は改行なし。句読点なし。篇名なし。短句（2～6字前後）を解釈する。

19：1560年、莊子通義，朱得之，捫明嘉靖43年浩然齋刊本影印。

本稿でとりあげた諸資料の「著作年代と依拠した版本の出版年代」を比較してみると、本稿番号1～15は両者の結びつきが時間的に離れ過ぎている為、体例の原初形態を明確にすることは困難である。番号16は著作が1538年、出版が明万曆（1573－1620）とあるから、このあたりからそろそろ安心できる。番号17・18も16と同様である。

さて、番号19はどうかといえば、これは著作が1560年、出版が明嘉靖43年（1564年）とあるから、成書当時の体例を正しく伝えていると推測してよからう。因に《刻莊子通義引》には、「皇明嘉靖庚申日靖江朱得之書」とある。嘉靖庚申は1560年である。

莊子通義は上述の如く初版本が完全な形で残っているため（見嚴靈峯編無求備齋莊子集成統編3及4），これによって成書当時の体例を正確に知ることができる。本書の特点として、筆者は以下2点を指摘する。

- ①目次。
- ②原文右側に付記された小注。

以下、説明する。

①〔目次〕

本稿番号1～15は、上述の如く「著作年代と依拠した版本の出版年代」が乖離し過ぎているため、目次の変遷を知りたくてもできないのであるが、次の5件は検討する必要がある。

◎312年、莊子注、郭象。

これは嚴靈峯に依れば宋版が現存する。筆者の知る限りでは、全33篇を収録する莊子注釈書としてはこれが最古のものである。因に、嚴氏は郭注以前の文献として阮籍の達莊論を莊子知見書目に記しているが、筆者は私蔵していない。嚴著知見書目に曰く：

惟無詰訓。（見中編48頁）

詰訓がないのであれば注釈書ではない。後世に与えた影響力を考慮するならば、郭注は莊子注釈史上最初に出現した巨星といえよう。

これには《南華真經篇目》と題する目次がある。全10巻、各巻2～4篇を収める。各篇とも「～篇」とはいわない。また「第□」と数字を記すこともしていない。ただし、本文中では数字を記す。例如：

莊子内篇逍遙遊第一

この文献によって、宋代には目次付きの注釈書が存在したと確認できる。

◎1084年、南華真經章句音義、陳景元。

章句音義叙に曰く：

元豊甲子歲上元日叙。

これによって、成書年次は元豊甲子（1084年）と分かる。ただし、現存する文献は嚴氏によれば：

芸文印書館挾清道光間錢熙祚刊指海本影印。（※清・道光：1821－1850）

とあるから、成書当時の原版がどのようなものであったかは不明である。嚴氏編莊子集成初編5所収本には目次はない。目次はないが、本文中に分章された段落と章名は、莊子通義と同一である。南華真經章句音義叙に曰く：

今於三十三篇之内，分作二百五十五章，隨指命題号日：「章句」，逐章之下音字解義釈事類標為「章義」。

本文をみると、逍遙遊篇の場合、下の如く分章する：

《章名》	《文頭》
順化逍遙	北冥
極変逍遙	湯
^マ 无己逍遙	堯
^マ 无功逍遙	肩吾
^マ 无名逍遙	宋人
適物逍遙	惠子……瓠
^マ 无為逍遙	樗

これを莊子通義と校合すると、ぴったり一致する。通義に曰く：

《文頭》	《章名》
北冥有魚	順化逍遙
	推変逍遙
堯讓天下与許由	^マ 无己逍遙
肩吾問干連叔	^マ 无功逍遙
	^マ 无名逍遙
惠子大瓠	適物逍遙
惠子大樹	^マ 无為逍遙

筆者は陳著章句音義以前に、各篇を段落毎に分章した作品のあることを知らない。もし章句が最初であったならば、通義は陳著章句音義を踏襲した可能性が大きい。

◎1084年、南華章句余事、陳景元、捩明刊正統道藏本影印。

これは恐らく陳景元・南華章句音義の目次であったのかも知れない。《分章篇目》と題して、全頁目次だけを載せる。各篇の《篇目》下部に、《章目》の数を付し、次に《章目》を列記する。その内容は、前述の章句音義・通義の《章名》と同一である。

◎1086年、南華真經直音、賈善翔。

序末に目次を収める。例如：

逍遙遊第一

篇名と数字は、現行本と同一。

◎1294年、莊子南華真經点校、劉辰翁。

《莊子南華真經篇目》と題してから、内外雜篇と分けて、おのおの篇名を載せる。数字はない。

以上検討した5件中、通義に深くかかわると思われる文献は、陳景元の章句音義と章句余事である。両書とも現存する文献は、明清代のものであるが、内容上の改変はないと思うので、陳著2件は通義に影響を与えたと仮定しておく。

通義の目次は、前述の如く各篇を段落毎に区切った文頭を記し、その下に各段落の要旨を2～5字句にまとめた章名を付すという体例から成る。このような目次は、読者にとっては大変便利な趣向なのであるが、惜しいことに頁が記されていない。巻毎の頁はあるにはあるが、それが目次に活かされていないのである。

次に、段落について一言述べる。吳澄の南華内篇訂正（1331年）の段落は、通義と同一である。ただし、章名は記してない。そのかわり、各段落末に「右第□章」と付記する。その数字は、通義の《章目》順序と符合する。

以上を総合すると、通義（1560年）は陳著章句音義（1084年）のみならず、吳著内篇訂正からも影響を受けた形跡があるといえるかもしれない。

②〔小注〕

原文の右側に、字義を小文字で略示する。

例如：

北冥^海……怒而飛……海運^動……天池也^海。

筆者の知る限りでは、このような形式で付記された小注は、莊子通義を以て嚆矢とする。浅積あるいは通義の類では、大変便利な工夫といえよう。

上述の「目次」「小注」と併せて章末の解釈部分も本書の体例の一環として、検討する必要がある。

通義は分章毎に章末に章全体の解釈部分を設ける。それは2つ部分から成る。1つは朱得之の通義、他の1つは褚伯秀の南華真經義海纂微である。通

義は「通義」，義海纂微は「義海」と括弧されており，その後に解釈が続く。通義以前の注釈書には，このような体例は見当たらない。郭象の莊子注は，郭注と陸徳明・音義を収め，成玄英の疏は郭注と成疏を収めるが，両本ともそれらは小さく区切られた語句の下部に付記された注あるいは疏であるにすぎない。通義の場合は分章毎に章全体を一括して解釈した所に特色がある。

以上，「目次」「小注」「解釈」について述べたが，最後に欠点を記す。

本文・解釈ともに従来どおり文頭の改行はない。句点は本文は不完全ながら圈点されている。ただし解釈部分はそれを欠く。

20：1566年，郭子翼 莊，高昇，扈明 嘉靖 間天一閣 刊本 影印・清李調元 刊 函海 本 影印。

文頭は改行あり。ただし，本書では文頭を1字分上げることによって改行する。従って，第2行以降は第1行よりも1字下がった位置で文が続くのである。

現代の改行は，日本では1字下げ・中国では2字下げが普通であるが，本書は1字上げになっている。「上げ下げ」の違いはあっても，改行したことには違いない。これは体例史上，画期的なアイデアといってよい。（中国人の自然発生的着想によるのか，それとも西洋の影響があったのかは不明であるが）とにかく，莊子文献に関する限り，改行は本書を以て嚆矢とする。

原文をその後に続く解釈よりも1字上げにする例は，これまでもあった。

1070年，王元沢，南華真經新伝。

1260年，林希逸，南華真經口義。

1294年，劉辰翁，南華真經点校。

1367年，羅勉道，南華真經循本。

がそれであるが，これらの出版年次はいずれも明代である。ということは，明代では既に文の内容に応じて文の位置を上下に変化させるという体例が確立していたことがわかる。「文の位置を上下」することと「改行」することとの間には，何らかの関連があるように思えるのであるが，この問題は疑問のまま保留し，後日考究したく思う。

平木 真快

句読点はまったくない。目次なし。

21：1566年，南華發覆，釈性通，挾清乾隆14年刊本影印。

文頭は改行なし。句読点なし。篇旨あり。目次なし。原文を短く区切り，その下に注（小文字2行）を付す。全体に体例上特記すべきものはない。

22：1567年，莊子類纂，沈津，挾明隆慶元年刊本影印。

文頭は改行なし。句読点なし。篇旨は齊物論篇と養生主篇のみ篇末にあり。全体に原文を収録しただけで，注もなきに等しい（ごく僅かではあるが音釈あり）。目次なし。体例上，特記すべきものはない。

23：1574年，莊子口義補注，張四維，挾中華民國国立中央図書館蔵明万曆5年何汝成校刊本影印。

文頭は改行なし。句読点なし。内篇は篇旨あり。ただし，外雜篇は篇旨なし。目次なし。原文は段落毎に区切り，1字下げてから解釈する。体例は林希逸の莊子口義と同一。各段落末尾に張四維の「補注」を付す。篇末に褚伯秀の「義海纂微」を総論として付す。（朱得之の「通義」も少し収める）

1991-05-08，其の1浄書，待続。